

この本と私

読むほど、気付くほど
書くほど、判るほどがある

「弟・植村直己」

植村 修著

冒険家 植村直己さんが北米のマッキンレーで消息を絶って、31年が経ちます。生前、自身で、冒険は生きて帰ってくることに言っていたのに、好きな山で遭難するのは。当時のニュースを折る気持ちでみていたのを思い出します。植村さんが世界的に評価されるのは、単独行だったことが挙げられます。明治大学山岳部に入り、登山技術を習得すると、自分は不器用で協調性がかけると判断してから、全て自分で実行しました。北極圏1万2千キロ単独犬ぞり行の際に、徒歩で日本縦断を試みたあたりに、時間をかけて慎重に行動する面がうかがえます。単独行といえ、全くの一人では、成功には至りません。お金もありませんでした。それでも、夢を追い続けられるのは、応援してくれた人を大切にしたこと、そして、親代わりだった10歳年上の兄修さんの存在がありました。本書は、植村さんの冒険を詳しく綴るのではなく、長兄の弟を思う気持ちを書かれています。全ての冒険に必要な資金面の援助、様々な事務手続き、伴侶となる公子さんとの結婚の相談、冒険先でお世話になった方が直己さんの功績を讃える活動をされる後の後見など。偉大な冒険は長兄・修さんとの二人三脚であったことがわかります。私事ですが、当時92歳だった直己さんの父・藤治郎さんに逢って、直己さんのお墓参りをさせていただいたことがあります。今にも帰ってくるという明るい表情で話してくれました。直己さんが育った足跡を本書で読んで、家族愛が人を育てるといふ面を教えられました。

編集工房ノア

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞